

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

一声、一汗、みんなで築こう豊かなふるさと・なたうち
 ～ものづくり、地域自立と、なたうちたんけん・はっけん・ほっとけん～

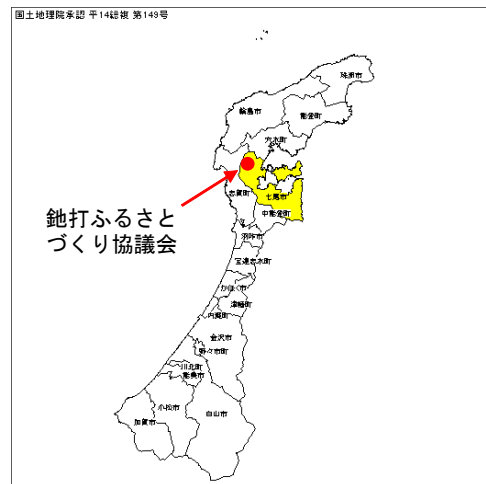
なたうち
 受賞者 **鉦打ふるさとづくり協議会**
いしかわけんなおし
 (石川県七尾市)

■ 地域の沿革と概要

石川県七尾市は、平成16年10月、旧七尾市、田鶴浜町、中島町、能登島町の1市3町が合併して発足した。能登半島の中央部に位置しており、七尾湾周辺に市街地が展開し、東西は山地に挟まれ、南は平野が広がっている。人口は57,900人（平成22年国勢調査）、面積は318.04km²で、64%を林野が占め、農業は水稻を主要作物とする零細農家が大勢を占めている。

鉦打(なたうち)地区は、市の北西部に位置し、七尾湾に注ぐ熊木川の中上流域に位置する10集落から構成されている。地区のほとんどを山林が占め、水田約200haが主に熊木川沿いに広がり、地区の中流域の集落は平地が広がるが、上流域の集落は狭隘な谷沿いに立地しており、農村的集落と山村集落が混在した地区である。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

当協議会は、10地区の町会連合会、農事組合法人上畠（うわばたけ）機械利用組合やNPO法人なたうち福祉会など10団体と個人により構成されている。協議会は、藤瀬霊水公園を始め、農産物直売所やふるさと農園を整備するほか、「郷土芸能祭」の復活や「鉦打茶屋まつり」の新設による地区住民間の交流、金沢大学地域連携センターとの勉強会や首都圏大学等のインターンシップ受入れなどにより「ヨソモノ」の視点と知恵を借り、これまで埋もれて

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	57.5%
	総世帯数 313戸
	総農家数 180戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 31戸 1種兼業農家 4戸 2種兼業農家 97戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 2,877ha 耕地面積 107ha 田 102ha 畑 5ha 耕地率 3.7% 農家一戸当たり耕地面積 0.6ha

いた地域資源に「気づき」、むらづくりのノウハウに一層の磨きをかけている。

特に、本地区の清らかな能登の里山を活かし、ハザ干しによるブランド米の鉦打米や能登野菜の漬物の製造などに取り組むとともに、今後の高齢農業者のリタイヤを見越した全地区による集落営農の組織化構想を描いている。

また、協議会では「昼間に安心して仕事に出かけられるように高齢者向けのサービスを実施してほしい。」という要望を受け、高齢者介護を地区住民が参加する形で、NPO法人を設立して介護施設の設置、病院への送迎、安否確認、買い物代行サービスなど他地区にはない取組を行っている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

当地区は、林業を中心に栄えてきたが、輸入材の増加などによる林業の衰退によって集落を離れる人が増え、昭和40年代後半から徐々に過疎化が進み、一部の集落はいわゆる限界集落が目前まで迫るような状況となった。

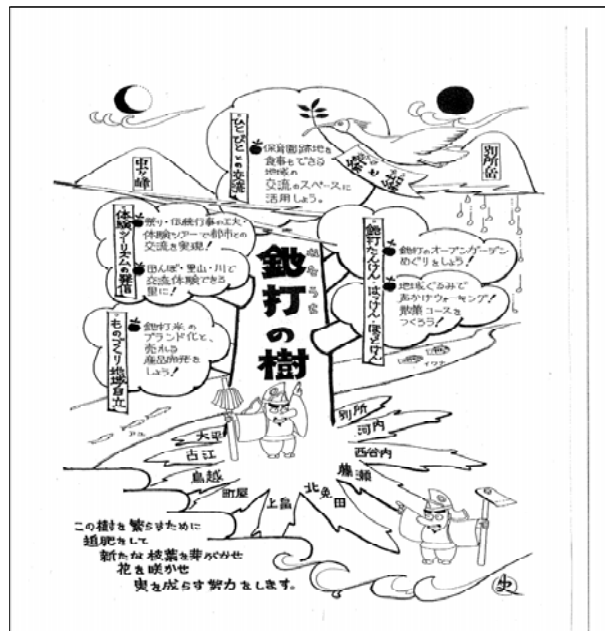
【第1段階：基礎的な集落環境整備の実施】

昭和56年、町会長、生産組合長などの有志らが集まり、地域づくりに関する様々な協議をする場として「鉦打むらづくり推進会議」を設け、住民参加と合意の下、簡易なほ場整備の実施やミニライスセンターの建設、集会所の整備等を実施した。

【第2段階：地域資源の発掘と祭りの復活を通じた地域の結束】

平成4年、「10集落はひとつ」との思いを掲げ、従来の推進会議の構成員に商工会や在京鉦打郷友会等を新たに加えて「鉦打ふるさとづくり協議会」として改組した。そして、地域資源である藤瀬霊水公園と農産物直売所の整備、ふるさと農園オーナーの募集等を行うほか、地区住民が参加する「郷土芸能祭」に加え、農産物の品評会等を内容とする「鉦打茶屋まつり」を新設し、これを定期的で開催することで、集落間の結びつきを強めていった。

第2図 協議会の取組イメージ



【第3段階：外部の視点と知恵を活かした新たな展開】

平成20年から交流を持つようになった金沢大学地域連携推進センター等の先生方を招いた勉強会の開催や、金沢大学と首都圏の大学からのインターンシップの積極的な受入れにより、いわゆる「ヨソモノ」の視点と知恵

を借り、鉦打米のブランド化、能登野菜の規格外品を活用した漬物開発、田舎味噌などの特産品づくりにも取り組み、所得向上と雇用創出の場を確保するとともに、夏祭り（キリコ祭）や秋祭り（杵旗祭）、稲刈り等農作業体験などによって都市住民との交流を深めていった。

（２）むらづくりの推進体制

本協議会は、「鉦打地区町会連合会」、「鉦打地区公民館」等の地域住民団体、「農事組合法人 上畠農業機械利用組合」等の農業団体、商工会、在京鉦打郷友会など13団体、地区内の個人（市議会議員等）から構成され、役員は、会長1名、副会長2名、監査委員2名、委員19名の合計24名（うち女性4名）である。また、専門的な課題については、多くの住民参画を得て検討を深めるため、「生産環境部会」及び「生活環境部会」を設置している。

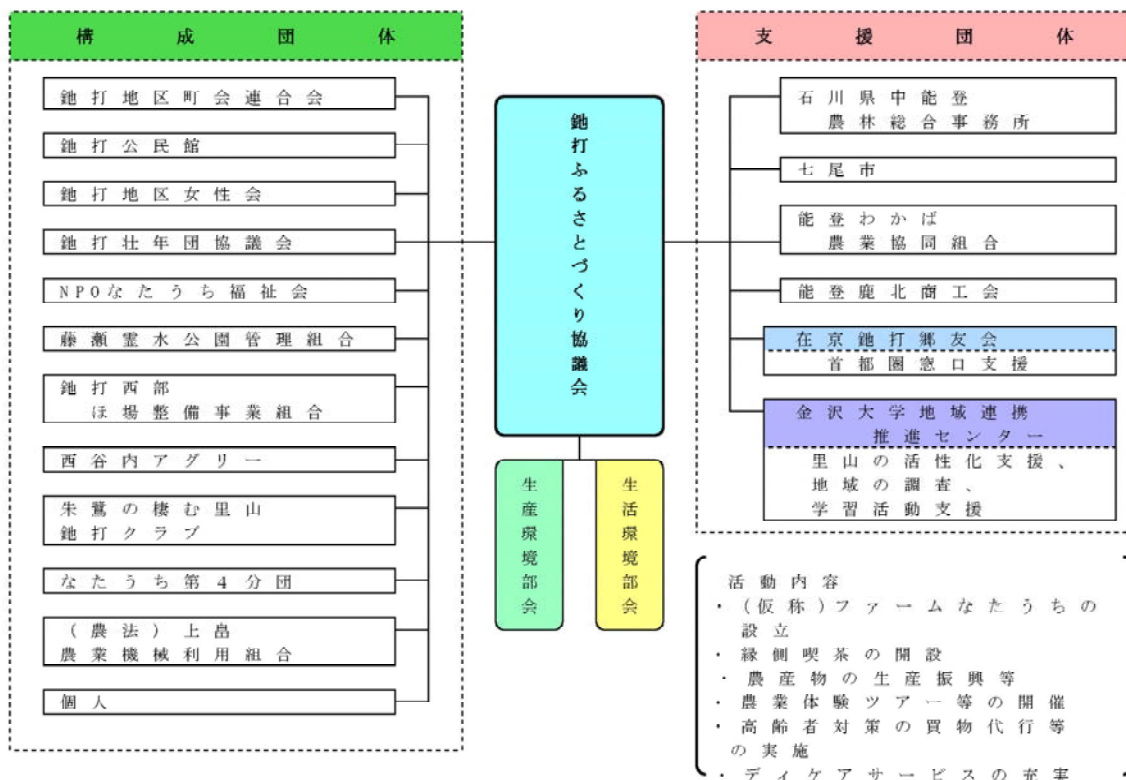
ア 鉦打地区町会連合会

10集落（別所、河内、西谷内、古江、藤瀬、鳥越、大平、町屋、上畠、北免田）の町内会長を中心に、伝統的行事や防災活動の実施とともに、各集落の住民に対する連絡調整を実施。

イ 鉦打地区公民館

地区住民のコミュニティ活動や社会教育活動を実施。

第3図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

鉦打ふるさとづくり協議会は、「一声、一汗、みんなで築こう豊かなふるさと・なたうち」、「ものづくり、地域自立と、なたうちたんけん・はっけん・ほっとけん」をスローガンに掲げている。協議会と地区住民は、藤瀬霊水公園などを整備するために住民総出の度重なる話し合いと工事を行ったことにより、「むらづくり」への確実な手応えと大きな自信を得ることとなり、これを契機にいろいろな活動に結び付いている。また、他県のむらづくりの先進地視察や地区住民・中高生に対するアンケートなどを通じ、「鉦打に住みたい、住んで良かったと思えるふるさとづくり」を住民みんなが考え、実践するようになってきている。

2. 農業生産面における特徴

昭和40年度以降のほ場整備事業により、地区内の農地200haにおいて基盤整備が完了している。そのうち134haにおいて、中山間地域直接支払制度の対象として地区住民が総出により法面除草や用水補修等を行い、生産基盤の維持とともに、美しい能登の里山の景観の保持に努めている。また、当地区にはかつてトキが飛来していたことから、再びトキが飛来する環境づくりを目指し、環境保全型農業の推進や一部集落ではビオトープの設置などにも取り組んでいる。協議会が進めるこれらの取組は、平成24年の能登地域の世界農業遺産登録にも貢献している。

(1) 「能登の里山」資源を活かした特産品の開発

- ① 虫ヶ峰や別所岳の源流を用水として田に引き入れ、昔ながらの天日による「ハザ干し」を今なお続け、地域ぐるみでおいしい米づくりに取り組んでおり、「鉦打米」としてブランド化を図っている。
- ② 能登野菜として指定されている中島菜、小菊かぼちゃ、金糸瓜(きんしゅうり)はこの地で先駆的に栽培が始められこともあり、産地化されている。
- ③ 農業所得の拡大と市場出荷の規格外品等の有効活用を目的とした加工処理施設が整備され、地区内女性の加工グループ「みつば会」と「七草会」が「中島菜漬」、「金糸瓜の粕漬」、「おばば味噌」などを製造し、主に道の駅や藤瀬霊水公園内直売所、県内外のイベントや在京鉦打郷友会を通じて販売している。

第4図 ふるさとづくりのイメージ

■鉦打地区:	
「能登の里山里海」世界農業遺産(GIAHS)認定を活かしての地域コミュニティの再生 10集落が1つになった持続可能な「ふるさと鉦打づくり」事業を展開する	
朱鷺の棲む里山再生事業	須久保集落において朱鷺が飛来するビオトープ環境づくりを行い、耕作放棄地の解消と環境保全型農業の研究と育成をめざす。
「能登の里山」資源を活かした生業事業	低コスト生産をめざした土地基盤整備を進め良質な鉦打米の生産と里山で栽培された農産物を活かし、付加価値の高い農産加工品を生み出すことで、地域の活性化と新たな雇用の創出をめざす。
「能登の里山」農業体験&祭体験ツーリズム事業	農業体験や祭礼行事の参加を通して都市部の人々との交流をはかる。農業と祭礼行事の担い手不足の解消と同時に中山間地域への交流人口増加をめざす。



写真1 鉦打米のパッケージ



写真2 中島菜の漬物製造

(2) 集落営農による効率的な農業経営

協議会の構成組織である「農事組合法人 上畠農業機械利用組合」は、平成26年現在、構成員は16戸である。経営耕地25ha(地区内15ha)において水稻、大豆、野菜(ねぎ、中島菜、小菊かぼちゃ等)の栽培、水稻・野菜の育苗、加工品の販売を行い、その売上げは年々伸びており、構成員には30代の若手もいることから、地域農業の中核として期待されている。



写真3 上畠農機利用組合員

協議会では、今後の高齢農業者の離農を見越して、土地持ち非農家を含めて出資者を募り、鉦打地区において集落営農を担う「仮称：農業法人 ファームなたち」の設立を予定しており、今年度中に組織を立ち上げ、当面は4集落分(45ha)について先行して営農を開始する予定としている。将来的には、「みつば会」と「七草会」が行っている農産物加工を同法人に取り込むとともに、稲作は同法人、畑作は「農事組合法人 上畠農業機械利用組合」に特化し、両法人が地域農業を牽引していく構想を描いている。

また、より効率的な経営を目指し、平成26年度から30年度までにかけて地区西部における60haの農地を大区画化ほ場として整備することを計画している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 「祭り」を通じた一体感の醸成

鉦打地区には、「キリコ祭」や「杵旗祭」の宗教・民俗的な祭りとは別に地区住民自らが楽しむ催し物がある。そのうち「鉦打芸能祭」は、戦後まもなく始まった集落対抗の演芸大会であり、一度途絶えたものの復活し、4年に1度開催されている。また、「鉦打茶屋まつり」は平成6年から始まり、鉦打芸能祭の中間年に、農産物の品評会、即売会や丸太切り競争などのいろいろな催し物を行っている。協議会が中心となってこれらの祭りを開催し、地区住民の自主性と積極性を促し、集落の枠を越えた地区全体の一体感を醸成している。



写真4 杵旗祭

(2) 住民の提案で実現した高齢者福祉

本協議会において、地域づくりの方向性について外部の有識者を交え、地区住民の間で議論した際、「昼間に安心して仕事に出かけられるように高齢者向けのサービスを実施してほしい」との声が上がったことから、平成22年に地区住民の参画による「NPO法人なたち福祉会」を設立し、病院等への送迎、買物代行、配食サービス、安否確認サービス(「ニコニコ便」)などを開始した。平成24年度には、閉鎖した保育園を改築して

「なたうちニコニコホーム」（小規模多機能介護施設）を開設した。このホームには、介護士、調理師、保健師等の資格を持つ12名（施設長をはじめ、9名が女性）で運営され、21名の地域高齢者が利用している。

また、買物代行、「ニコニコ便」等は30～40代の女性4名で対応しており、25年度における買物代行の利用者数は約1,100人、安否確認数は約1,100回となっている。ニーズは年々高まってきており、農産物直売所への商品の搬入代行（軒先集荷）も検討するなど、事業の拡大を図ることとしている。



写真5 買物代行・支援

（3）グリーン・ツーリズムの展開

協議会は、都市住民や学生等を対象とした農業体験や祭り体験を通じて様々な交流事業を展開し、

- ① 金沢大学の学生4名を2週間インターンシップとして受け入れ、耕作放棄地の実態把握や農作業とキリコ祭りの体験をする場を提供すること（平成22年度）、
- ② 金沢大学や在京の大学生等の参加の下、夏と秋の祭り体験や農作業体験からなるツーリズム事業を実施すること（平成24、25年度）、
- ③ 留学生23名を受け入れ、夏祭り体験、浴衣着付け、そば打ち体験等を行う場を提供すること（平成25年度）



写真6 留学生のそば打ち体験

などを行っている。これらの交流に当たっては、地域農産物の販売につながるように工夫をしており、以下のような例が見られる

<事例1>

平成4～6年、在京鉦打郷友会を窓口に関東圏の小学生を対象とした「キリコ祭体験ツアー」を開催し、地域の農家が体験指導や民泊をさせたところ、小学生が成人した後も個人として民泊農家との交流が続き、鉦打米や農産物等を送るなどのつながりができている。

<事例2>

平成9年、七尾市の演劇堂において、俳優の仲代達矢氏のロングラン公演を機に来訪した都市住民に対し、地区内農家を休憩所として提供。その際、鉦打米を食事に提供してPRしたところ、農家から都市住民に対する米の販売が現在まで継続している。

（4）定住促進プロジェクト

平成26年現在、地区内には55棟の空き家があり、平成24年に市内他地区のアパートに住んでいた新規就農者、平成25年6月には金沢大学の研究員が協議会の斡旋により住み始めた。現在、協議会では、傷みの小さな5棟の家主に働きかけて七尾市の空き家バンクに登録させるほか、居住の申込みがあった際には家主への取次ぎ等を行っている。